

かくれおん

傑作選

二〇一二年 前期

同志社ミステリ研究会

かくれおん

傑作選

二〇一二年
度前期

CONTENTS

006 桜の樹の下には
伊吹亞門 / 『桜号』より

013 守護天使
浅葱なみだ / 『邪号』より

050 冷たい星に気をつけて
伊吹亞門 / 『宇宙号』より

063 日曜日の立方体
さいとうななめ / 『青梅雨号』より

096 蠟燭
小春 / 『邪号』より

106 【露湖子捕物帖】虚像囚人三〇三
伊吹亞門 / 『邪号』より

138 兆し
野邦丸 / 『宇宙号』より

194 作者コメント

桜の樹の下には

伊吹亞門

「ようこそおいで下さいました」

村長と名乗る女はそう言いながら頭を垂れた。村はずれの小高い丘の上、大きく黒々とした巨桜の下である。

樹下にたたずむもう一人、紺衣の探偵は軽一会釈で以て返答をする。「アナタノ助ケガ必要ダ」。そうとだけ記された電報を探偵が受け取ったのは一昨日のこと。電車とバスを乗り継ぎ、寂れた停留所に降り立った探偵を迎えたのがこの女だった。四十半ばほどだろうか。渋染の着物のせいで幾分か落ち着いては見えるものの、

切れ長の眼、肉づきのよい四肢、すべすべとした白い肌、そして何より言葉の端々に、隠しきれぬ熟れた果実の様な芳しさがありありと感じとれた。

それにしてもと探偵は眼下に広がる景色を見やる。見渡す限り一面の桜。薄墨色が風に舞い、それは息も詰まるほどである。桜に埋もれた村、まさにそう呼ぶのが相応しい景観であった。

「壮観ですね」

思わず本音が漏れる。美しいとは到底思えず、もはや鬼気迫る凄みと狂気しかそこからは感じ

られない。探偵の言葉に女は微笑み、そして、
「屍体が埋まっているからですよ」
と静かに答えた。

「何ですって？」

女の顔を見る探偵。巨桜を見上げながら、女
は答える。

「昔からのならわしなのです。ずうっと続くこ
の村の風習……。ですからこの下にも」

濡れた様に黒い樹肌を、愛おしそうに細い手
のひらで撫でる。

「私の良人が眠っているのですよ」

ふむと探偵はあごを撫でながら前に進み、遠望を仰ぐ。

「桜の下に屍体を埋めなければならぬとは、なかなか変わった風習です。しかしまあ、それならこれだけの桜の数にも納得がいくというものの」

探偵の後ろで、女がふふと笑う。

「そうではありませんよ」

え、と探偵は振り返る。わらいながら、女は繰り返す。

「そうではないのです」

風が吹いて花を散らす。薄墨色の花卉が女の髪にかかる。

「この村で、桜は墓標なのです」

「墓標？」

ええと頷き、すうっと伸ばした長い指で丘の下を指す。

「桜の下に屍体を埋めなければならぬのでは
ありません。屍体の上に桜を植えなければなら
ないのです」

誘われる様に、丘のすそのを見下ろす探偵。

「……なるほど」

まだ新緑の、植えられて間もないであろう
若々しい桜の苗木が、丘の下面に何十本と広
がっている。

「だからあなたをお呼びしたのですよ」

艶然と微笑む女の後ろでは、春の嵐を孕んだ
黒い雲が、山の頂からゆっくりと膨れあがって
いた。

守護天使

浅葱なみだ

日曜日

目の前に突然天使が現れた。

「わたしはあなたの守護天使です。以後お見知りおきを」

そして天使は淡々と告げる。

「これからの一週間、あなたの命を脅かそうとするものが三人現れます。わたしはそれらの存在からあなたを守るために派遣されました」

「どういうことだ？」

「あなたを殺そうとする三人の人間からあなたを守ること、それがわたしに課せられた使命と

いうことです」

その言葉は私にこれ以上ない衝撃を与えた。

「三人の人間に、俺は命を狙われているというのか」

「そうですね。このまま何もしなければあなたは明日にでも一人目の凶刃に倒れて死ぬことになるでしょう。もし仮に一人目の殺人を回避したとしても次は二人目に、さらにそれを回避しても、今度は三人目の手によって殺されてしまいます」

天気予報を読み上げるような口調だった。

「そんなのは嘘だ」

「いつの世も、当事者は無自覚なものですよ」

「でも、三人もの人間に：」

「死期は互いに呼び合うのです」

足元が抜け落ちるような恐怖が、私の中に満ちていく。

「次にわたしが現れるとき、それはまさにあなたの命が消える瞬間とご覚悟ください。ですがご安心を、あなたの命はわたしが必ずお守りいたします」

「：：何故：：」私は声を振りしぼり訊ねる。

「どうして、俺を」

天使は薄く微笑んだ。

「人が人に殺されるということは、本来あつてはならないことなのです」

次の瞬間にはもう、その姿は消えていた。

月曜日

一睡もできぬままに、私は会社へと向かった。車中で流れるグノシエンヌの重々しい曲調が心をより陰鬱にさせる。悪いほうへ悪いほうへと向かう思考を振り落すように、私は荒々しくス

テアリングを切った。

オフィスに到着し自分のデスクに座った私は、そろりと辺りを見回してみる。見慣れた同僚、上司、先輩、後輩の顔。みな気心の知れた大切な仲間ばかりだ。この中に、もしかしたら自分を殺そうとしている人間がいるというのか？

にわかには信じられなかった。

「どうした。月曜の朝から暗い顔して」

突然、後ろから肩を叩かれる。私は刃物でも突きつけられたかのように大仰な身振りでその手を払いのけてしまった。

「な、何だ？　そんなに驚いて……」

同僚の三上だった。三上は払われた手を撫でながら、怪訝な顔で私を見る。睨まれるのも当然だろう。私は自分の非礼を詫びた。

「疲れてるんじゃないのか？」

「いや……何でもないんだ……」

「そうか……まあ何かあればいつでも聞いてやるよ。ところで今日の外回り、俺と一緒にだつて話は聞いてるよな？」

「ああ」

「お前の車で行こうと思うんだが」

「ああ……」

何を聞いても生返事にしかならなかった。

「なんだか本当に疲れてるみたいだな。ま、運転は俺がしてやるから」

三上は私の背中を勢いよく叩いてデスクに戻っていった。

その日の営業は散々だった。

三上のフオローがあったおかげでなんとか一応の面目は保てたものの、職場に戻るころには私の精神はすっかり疲弊しきっていた。あまり

の情けなさに、三上は私を言い咎めることすらしなかった。

「今日はさっさと帰って、ゆっくり休め。その方がいい」

私は言葉に甘え、三上に残りの仕事を任せて退社した。

車に乗ってエンジンをかけると、助手席に天使が出現した。

「こんばんは。だいぶお疲れのようですね」

「誰のせいだと思ってるんだ！」

「この車を運転してはいけませんよ」

「なに？」

天使はフロントガラスを見つめたまま続ける。「わたしが現れたということが何を示すのかは、昨日お話したはずです」

回らない頭で昨日の会話を思い出す。「……まさか」

「そうです。お察しの通り、このままではあなたは死にます」

「馬鹿な」

「この車は≪一人目≫の手によってブレーキのところ細工がされています。このまま運転す

ればあなたは暴走運転による大量殺人を起こしたのち、自らも事故によつて命を絶つことになるでしょう」

驚いてブレーキペダルから足を浮かす。幸いにもまだ車は動いていない。

「ブレーキの裏を触ってみてください」

言われるがまま、私は暗闇をまさぐる。すると何か固いものがブレーキの裏に挟まっていた。空き缶だった。なるほどこれではいくらブレーキを踏んだところで効果がないだろう。それを見た天使はこともなげに言う。

「……ほら、ね」

背筋にぞくりと悪寒が走った。もしこいつが教えてくれなかったら私は……しかし誰がこんな——？ 思いかけて、私ははつと息を呑む。

「もうあなたにもお分かりでしょう」

私の心を見透かしたような、冷淡な言葉。そんな……

「……三上か？ そんな……どうして！」

「感情はいつでも不可知です。どこで振じれていたとしてもおかしくない。それに今日のあなたは疲れ気味でしたから、帰り道で事故を起

こす可能性もないとは言い切れない。起こしたところ、仕事でのストレスや過労という原因を疑う人はまずいないでしょう。彼はそこを狙ったのですよ」

「疲れていたのはお前が現れたからだろ！お前さえいなければこんなことにはならなかったのかもしれないじゃないか！！」

怒りのまま、ハンドルに拳を叩きつける。痛みを感じる余裕すらなかった。

「そうでしょうか。遅かれ早かれ、彼はあなたを殺していたと思いますよ」

「どうしてそんなことが言い切れる！」
「現に、こうして実行に移しているではありませんか」

天使が無機質な空き缶を眺めながら嗤う。返せる言葉はなかった。

火曜日

私は会社に辞職願を提出した。帰る途中で三上とすれ違ったが、互いに言葉を交わすことはなかった。

水曜日

あれから天使は姿を見せていない。私はテレビも電気も点けていない部屋で、死体のようにただ惰眠だけを貪っていた。意識を手放すほか、思考の海から逃避する方法はなかった。どうして三上は私を殺そうとしたのか、私の何が彼の心を狂わせたのか、そんなことばかり考えるのはもう御免だった。

「……なあ、いるんだろう」

私は目を閉じたまま虚空に呼びかける。返事はない。

「教えてくれよ。《次》はいつなんだ？」

《二人目》はいつ現れるのか、それは誰なのか。どのようにして私は殺されるのか。何も知らないことこそが深淵の恐怖であり、絶望を生み出していく。

「お前にはすべて解ってるんだろう」

咆哮のような冷蔵庫の音だけが部屋に響いている。新たに空気が動く気配はこれっぽっちも感じられない。

だが、私はたしかにその声を聞いた。

「残念ですがその質問にお答えすることはできません」

なにものにも形容しがたい浮世離れした声質。脳髓に直接響く回答。

「何故だ」

「いつ、とおっしやいましたね。それはわたしにもわからないからです」

天使は言葉を継いだ。

「厳密に言う、わたしにわかるのは『殺意』だけです」

「殺意……？」

瞼が重く、開こうにも開けない。まるで術にでもかかったかのように。

「すべての生命には生存本能が携えられています。あらゆる生命が、生きるために他者を殺す。それはきわめて原始的で、なおかつ普遍的な欲求です。ですが人間の抱く『殺意』は、そうした本能とは本質的に異なります——何故だか、おわかりになりますか」

「……いや、思いつかない」

ふうと吐いた呼吸は、果たしてどちらのもの

だったのか。

「人の殺意は純然たる本能ではないからです。

——例えばあなたは、空腹を感じたときどうされますか？」

「何か食べるだろうな」

「その食材は自らの手で殺した何かですか」

「まさか。普通に買ったものだよ」

「そうでしょうね。そんな風にあなたたちは自らの手を汚すことなく食事ができる。生きるために殺すということが無くなったのです。もちろん例外はあるでしょうが。人間の殺害衝動は

その発展とともに本能としての側面が薄れ、感情に支配されるようになってきました。これが≪殺意≫と呼ばれるものです」

私は言葉の意味を脳内で反芻する。

「生きるためではなく、殺したいから殺す……そういうことか？」

「そうですね。本能から遠ざかった感情のもとに人間が抱く殺意——とくに同じ種族である人間へ向けられるそれは、きわめて邪な感情です」

それは天使が初めて見せた本音のように感じられた。

「隠していても、強い腐臭を放つ死骸のようにすぐわかってしまう……ただ、そこから何がどのように起こるのかは歯車が動き出すその瞬間まで、誰も知ることにはできません。今解っていることは、強い殺意があなたに向けられているということだけ。わたしの予言もすべてそこからの推測にすぎません」

背中の下の冷たい床が、そのまま階下に崩れ落ちていくような錯覚を覚えた。殺されるその瞬間まで、誰も運命を告げてはくれない……

「知ることには不可能ですが、防ぐことならいく

らでも可能でしょうね」

天使がとりなすように言葉を継ぐ。

「あなたが殺されることはありません。どうかご安心を」

「何もわからないくせに？」

「それがわたしの使命ですから」

「お前は、」私は半ば投げやりな口調で尋ねた。

「お前は誰なんだ」

返事はない。

「天使ならば、神も何処かに存在するのか。お

前は誰の意志でここにいるんだ」

漸く瞼が開いた。日光に目が眩む。どこにも天使の姿はなかった。

木曜日

夕方、菜穂から電話があつた。二つ違いの妹は、この夏に結婚を控えている。そのことで相談があるから会えないか、という。私はしぶしぶ承諾し、近所の神社で彼女と落ち合うことにした。外出は憂鬱だった。だがもう一つ、不安

の要因があった。実家にはまだ、仕事のことを告げていなかったのだ。

待ち合わせ場所の神社は長い石段を上った先にある。めったに人が訪れず、子どものころは秘密基地代わりだった。妹ともよくここで遊んだものだ。私が到着してしばらくした後、菜穂が息を切らして現れた。

「お兄ちゃん、ひさしぶり」

最後に会ったのは正月だったろうか。あれから幾分か痩せて綺麗になった気がする。菜穂は私の顔を覗き込んで、

「なんか顔色、悪いけど……仕事が忙しいの？
だめだよちゃんと食べないと」

「いや……ちよつと、色々あつて」

小首を傾げながら、彼女は話題を近況報告へと移した。境内に座り、身振り手振りを交えながら次々と話を広げていく。菜穂には申し訳なかつたが、その内容はほとんど耳に入らなかつた。

「それでね、」

『こんにちは』

ふたつの声は同時だった。菜穂の隣に天使が

座っている。声が重なる。

『可愛らしい妹さんですね。きょうだいなのに
まるで似ていない』

「……どうしたのお兄ちゃん。そんなに驚いた
顔して」

『ですがお気をつけください。このお嬢さん——』
「お兄ちゃん……ねえ、お兄ちゃん？」

同時に喋っているのに、ふたつの声は、いや、
天使の声は、はっきりと聞き分けることができ
た。

『おそらく、あなたを殺す気ですよ』

「お兄ちゃんってば！」

天使の姿が消え、私ははっと我に返る。菜穂が私の肩を揺さぶっていた。

「しっかりしてよ。ほんとに大丈夫？」

「菜穂。相談ってなんだ」

「え？」

「相談したいことがあるって言ってただろ」

「あゝ」菜穂は瞳を陰らせる。だがすぐに微笑んで、首を横に振った。

「何でもないの。ほんとはただ、久しぶりに話

がしたかっただけ」

「——菜穂」

「あ、見て！ 街が一望できる。ほらほら！」
菜穂は石段のほうへと駆け出す。私の腕を引き、階段のすぐ手前まできた。

「あのへんがうちかなあ？」何気ないふりを装いながら、身体は少しずつ、石段の縁へと引かれていく。私はその手を引き剥がした。恐ろしかった。

「いい眺めだな」嘘だ。

「ねえ、あれ見て、お兄ちゃん……」嘘だ。

「どこだ？」菜穂が、そんなことをするはずがない。

どん、と背中に小さな掌が当たった。

「ごめんね。お兄ちゃん」

次の瞬間世界が回転し、私は意識を失った。

金曜日

私が病院のベッドで目を覚ました時、傍には菜穂が座っていた。菜穂は泣きながら私に謝罪し、全てを告白した。恋人が事業で失敗し金銭

に困窮していたこと、そして彼に唆され、保険金目当てに私を殺害しようとする目論んだこと。

その隣では天使が喋っていた。私はとっさに受け身を取ったため九死に一生を得たこと。菜穂から強い殺意を感じて、その計画に気が付いたこと。

何もかも戯言だった。

それでも私はまだ、死への恐怖を捨てきれずにいる。

あとひとり。

土曜日

「この状況は初めから決められていたのか」

私はいるともしれない天使に尋ねる。返事は早かった。

「運命というものは、わたしのあずかり知るところではありません」

「仕事も家族も失った。身体はもう動かない。こんなになってもまだ、俺のことを殺そうと思う人間はいるのか」

天使は答えなかった。

「滑稽だろうな。お前から見ると」私は自嘲す

る。

「こんなになってもまだ生きていたいなんて」
「それが生きるもののあるべき姿です」

目の前に天使の姿が現れる。——姿を見せたと
いうことは、誰かが私の命を狙っているという
ことだ。「どいつだ？」私は周りに悟られぬよう
注意を払いながら問いかけた。

見舞客なのか、病院関係者なのか、はたまた
見知らぬ隣の入院患者なのか。だが周辺に怪し
い人物はいない。天使のほうを見ようとしたそ
の時、胸の奥に激痛が襲いかかった。

「……!?!」

どくん、と大きな拍動がひとつ。ふたつ。

——心臓発作。咄嗟にその名が脳裏に浮かぶ。それは叫びたいほどの衝撃と苦しみだった、少しも声が出なかった。

「あなたは何か勘違いをされているようですね」
天使は慌てるそぶりも見せず、悠々とした動作でベッドに腰掛ける。重みや振動は一切感じなかった。そして信じられないことを口にする。

「殺意の主ならもう、三人とも明かされたではありませんか」

こちらに向けられた微笑みは、今までのどの表情よりも冷たかった。

そんな。私は必死で今までの出来事を整理する。

「——ああ。ちなみにわたしは『三人目』ではありませんよ」

視界が霞む。隣のベッドからは患者と見舞客の談笑が聞こえてくる。誰一人として私の異変に気付く者はいない。

「な……んで……」

「わたしの使命は、『あなたを三つの殺意から守

ること』と言いましたね。ですがあれは、『あなたを他者に殺させない』というふうに言い換えられることもできます。その理由は——あなたの命を神以外に奪わせないためです」

天使自身の口からその名前が出るのは初めてだった。

「神から告げられたあなたの本当の命日は、今日でした。だからわたしは今週中にどうしても三つの殺意からあなたを守り抜けなければなかつたのです」

天使は私の右胸に手を伸ばす。手が触れたと

たん、心臓の感覚がふと消えた。また、先程までの苦しきも。

「わたしからの餞別です。最後に何かひとつあなたの疑問にお答えしましょう」

「……三人目は『神様』とやらだったのか？」

「いいえ。違います」物憂げな表情だった。

手がそっと離され、再び心臓が爆発しそうな痛みに再び襲われる。

耐え難い苦しみの中、私は必死で口を開こうとした。だが声は出ず、掠れた息ばかりがヒュウヒュウと漏れるばかり。それでもこいつには

きつと伝わっているはずだ。私は命を削って問うた。

『——神とは一体、何なんだ』

「神とは死そのものです。だからこそ——殺意は邪なのですよ」

目の前が暗くなり、意識が墮ちる。

その瞬間、私はかすかに天使の声を聞いたよ
うな気がした。

「人が人ごときに殺されるなど、本来あつては
ならないことなのです」

冷たい星に気をつけて

伊吹亞門

星間不動産会社の調査員である私は単身F星の調査へと向かった。F星は蟹座第七星雲のほぼ外縁に位置する小惑星である。他社よりも先んじて無人星を見つけ、いち早く地質調査を行い売り物として我が社のモノとする、それが私の仕事だ。

*

「こりやあダメだろうな」

観測機の炭素棒を地表に突き立てながら私はそう呟いた。どんな仕事でもそうだろうが、長いことやっているとだいたいの勘の様なものがつ

いてくる。私の場合も例外ではなく、防護服越しにであつてもその星の大気で「可か否か」というのはだいたい感じられるのだ。

測定器がはじき出した値も案の定の結果だつた。表面重力はまだ調節可能な範囲だが、地表温度が低すぎる。我々にとって住みよい環境だとは到底言えそうもなかった。やれやれと溜息をつきながら、私は立ち上がった。

「それにしても……」

そう呟きながら私は辺りを見渡す。今まで多くの星を見てきたが、こんな変な星は初めてだ

った。

まず目に付くのは何十、いや何百本と乱立する細い鉄塔の様なものだ。耐寒金属でできたあきらかな人工物で、ちようど「7」の字の様な形をしていた。五〇メートルぐらいだろうか、目をこらしてよく見ると先が曲がってその先端からはワイヤーの様なもので黒っぽい何かいくつもがぶら下げられている。何だろうかと腰の作業袋から電子双眼鏡を取り出し、標準をあわせて覗いてみた。

「！」

焦点があつて「それ」の姿がはっきりとした瞬間、私は思わず目を離してしまった。無理もない、それらは人の形をしていたので。

そのままの形状で吊された者、斬り離された上半身だけが吊された者、更にはひとくくりにされた何十本もの腕や脚までも吊されている。彼らが生者でないことは明らかで、干魚の様に口にフックが通されたままぶらりと揺れている。

大量殺戮、そんな言葉が私の脳裏に浮かんだ。実際のところ、『不運な大災害』の名の下に貧し

い少数民族が悪質な土地ブローカーたちの手によって闇へと葬られていくのはそう珍しいことではない。私自身そういった話は聞かされていたものの、実際にそれを目の当たりにするのは初めてだった。土地調査員という仕事柄死体を見るのはそう珍しいことではないが、当然気分のいいものではない。

私はポケットから磁気通信機を取り出し、本社ステーションへと急いで連絡をとった。通信部に私の部署へと繋いでもらい、そのまま部長に状況を説明した。

「そうか、そりやあダメだな。手付けに手出し
たら後でエライ目にあう」

しようがないと繰り返す部長だったが、不思議
そうにこう言った。

「だけどそんな見世物みたいに晒しとくかね？
奴ら、証拠という証拠は消しちまうもんだが」
「それは私も思いましたが……でもそれ以外考
えられないでしょう。星間紛争にしてはそんな
報告ありませんでしたし」
部長はまあなああと呟き、他に何かあったかと
聞いてきた。

「まだ全域を見たわけではないので何とも言えませんが……」

そう答えながら私は電子双眼鏡で辺りを見回す。うず高い丘がいくつもあるだけで特には……丘？ 違う。あれは丘じゃない。あれは……。

「なに？ ホロホロ鳥の死骸だあ？」

頓狂な部長の声を耳にしながら、私は慌てて双眼鏡を構え直す。

「はい、山積みになってます。しかもそれだけじゃありません、横にはカルバン蟹の甲羅まで山積みになってますよ。どういふことです、こ

れは？」

「そりゃこっちが聞きたいよ。そこ外縁だろ？
環境全く違うんだぞ、なんでホロホロ鳥が死んでるんだよ。見間違いじゃないのか？ もっとよく寄ってみろ」

急ぎ足に寄ってみる。独特の青い羽根は全てむしり取られていたが、やはりどう見てもそれはホロホロ鳥の死骸の山だった。近くまで来て分かったが、かなりの数が山積みになっている。ホロホロ鳥はもともと大柄な鳥類だが、それにしてもかなりの数だ。千羽以上はあるだろう。

「どうだ、やっぱりホロホロ鳥だったか」

「ええ、羽はむしられていますかね。間違いありませんよ、こいつはホロホロ鳥です。わからないな、なんでこんなに死んでるんだろう」

「なに、羽がむしられているだって？」

私がそうだと答えると、部長は急に大きな声で叫んだ。

「わかったぞ、そこは冷蔵庫なんだ！」

「冷蔵庫ですって？」

興奮したように部長は早口でまくしたてる。

「寒冷的な気候を利用して、どこぞの星の輩がそ

の星を丸ごと貯蔵用に使っているんだ！そこにあるのは全部そいつの食料なんだよ！」

「しよ、食料って、じゃああの吊された死体も……」

そう言いながら鉄塔の方を振り返ろうとした時、突然どしんと大きな地響きが私を襲った。思わずうわっと叫んで地面に伏せる。

「おい、どうした？ 何があった」

膝をついて立ち上がろうとしながら、私は通信機を持ち直す。

「ああすみません。なんでもありませんよ。ち

よつと揺れただけです」

私がそう答えた途端、向こうの声色が急に変わった。

「なに、揺れたただって！ い、いかん、すぐにその星から脱出しろ！ 急げ！」

「え、脱出？ どうしてですか？」

何故か分からないが、部長の声はとても慌てていた。

「そりや地震じゃない、足音だ！ 冷蔵庫の持ち主が来たんだよ！」

「だからって、どうして……」

状況の掴めない私とは正反対に、通信機から返ってきた声はほとんど叫び声にも近かった。

「馬鹿、考えてみる！ お前は自分の家の冷蔵庫に虫がいるのを見たらどうするんだ！」

その時、急に視界が暗くなった。見上げると、そこには大きな靴があった。

日曜日の立方体

さいとうななめ

そろそろ雨が降りそうだな、と窓の外に目をやりながら思っていると、小さな影がかけてきて、私の太ももをつついてきた。

「……どうした？」

「だいはっけん」

鼻高々な表情をした、四歳児が私の脇に立っていた。少しだけ鼻息が荒い。興奮しているのだらう。腫れているのか、と心配になってしまふほどの赤みが頬には差しているが、これはいつものことだ。私は読み途中だった文庫本に葉をはさみ、机の上に置いた。娘はそれを見て、

少しだけ顔をこわばらせる。

「……おじやま、だった？」

「いいや、そんなことはない」

頭を軽く叩いたあと、脇の下に手を回す。くすぐりたい、と嬉しそうな声を出す。誤って力を入れすぎてしまえば、簡単に潰れてしまうだろう。そう思ってしまったらほど、この小さな身体は無防備で、純粹だ。一度息を吐いて、力を込める準備をする。

「暴れるなよ。……結構、重いんだから」

そのまま持ち上げて膝の上に運ぶ。いつもは

それだけで大喜びなのだが、今回はなぜか、ぶ
う、と顔を膨らませている。頬の赤みもさつき
より増しているようだった。外は少々薄暗いが、
今は昼の時間帯で、夕方と言うにはまだ早い。
テレビ放送を待ちわびているのだろうと思つて、
私はその連想を口にした。

「アンパンマン？」

ちーがーうー、と声に合わせて胸を叩いてく
る。

「お父さん、さっし、わるい」

「……瑞季、そんな言葉どこで……」

何気ないその言葉に危うく絶句するところで、また変なこと吹き込んだでしよー、と言つて、私の耳をつねる女性の姿が思い浮かんだ。

「……理絵か」

「お母さんがどうしたの？」

「いいや、なんでもない」

なんでもないってなにさ、と今度は背中を叩かれる。この年頃の子は、有り余った体力をいっただって消費しようとする。待ってくれ、と私はその運動を制止する。

「要件は、そっちじゃないだろ？」

「……えと、なんだっけ？」

悪びれのない顔で言う。

「……だいはっけん、じゃないのか？」

「そう、それだ」

嬉しそうにしながら、娘は背中に回した腕を

戻す。私の膝の上に正座したまま、フリルのついたブラウスの胸ポケットに指を突っ込んでい
る。目当てのものをつまんだらしく、にひっ、
と小さく笑みを零す。虫だったらどうしようか、
と不安がよぎる。

「……変なものじゃあ、ないだろうな」

そんなんじゃないー、と頬を膨らませて、ポケットから取り出したそれを、文字通り目の前にまで持ってくる。首をななめに傾けて、娘はいたずらっぽく私に問いかけた。

「これ、なににみえるでしょう？」

焦点が合わず、私は二、三度目をしばたたかせた。やがて像が結ばれて、それが意味をもつた形となる。

「∴∴サイコロ」

いったいどこで拾ったのか。指でつまんで、それを確認する。どう見ても、六面の、一般的

なそれだった。対面同士の目の和が必ず七になるように、一から六の目がそれぞれの面に割り振られている。面の背景色は白で、二から六までの目は黒の点、一の目だけが赤の点で描かれている。だが、この娘はなぜか得意そうな顔をしていた。

「せいかいだけど、せいかいじゃあないので」「それじゃあ、違う？」

娘は首を振ってみせる。キューティクルの整った髪がふわりと揺れる。
「ううん、ちがくもないよ」

「……さんかく？」

「これはしかく」

「……ごもつとも」

未就学児は立方体を知らない。この子にとっては、立方体も四角なのだろう。

「……まだ、わからないの？」

少しだけ不安がる。私が難しい顔をしているせいだろう。

「えーと、そうだな……。ヒントはあるのか？」

「ヒントー？　ずるだよー」

父親でもわからないことがあるのだと、自分

にも親に勝る部分があるだと知って、それが嬉しいのだろう。私の問いを聞いた途端、わざともったいぶるように身をくねらせた。

「瑞季さま、どうかお願いします」

そう言って、手を合わせる。しかたないなあ、と娘は満足そうに微笑んだ。

「さいころは、さいころだけど、さいころじゃないのです」

「サイコロ……じゃない」

なるほど、と思った。私は一旦サイコロを机の上に置くと、娘の身体の向きを反対方向にし

て、改めて膝の上に座らせる。わかったの、と聞いてくるので、たぶんね、と答えてみせる。手近なところからボールペンとメモ用紙を取って、机の上に置く。さあ、解答編といこうじゃないか。

「つまり瑞季、答えは、こういうことだな」

おそらく義務教育を終えた者であれば、誰もが浮かべるであろう「立方体」を描く方法のひとつ。斜投影図法。真正面に正方形の面を一つ配置し、それと隣り合う平行四辺形を二つ配置する。こちらの二面は奥行の面となり、その長

さは実寸の二分の一。正面の、正方形との角度は四十五度。キャビネット図と呼ばれている方法で、サイコロを描く。

「手前の面の向こう側は、隠れてしまっただけだ。だから、これはサイコロだけど、本当の意味では、誰もサイコロを捉えることはできないんだ。一度にすべての面を見ることはできない。だから答えは、『見えない』だ」

隠れて見えない部分は実線ではなく、点線で書く。立体というものをまだ学んでいない娘とはいえども、感覚として、空間の理解は出来る

だろう。どうだ、と自分の顎の下に向けてつぶやくと、むー、とうなっている。

「こたえ、あってるのに。……なんかむずかしい」

ずるだ、ずる、と娘は不満そうにつぶやく。

「そんなこと言わない。ついでに、面白いことを教えてあげるから」

そう言って、メモ用紙の余白部分にペンを走らせる。浮かび上がってくるのは、縦長の、太い十字だ。その輪郭は、アルファベットの「+」のようでもある。つまり、立方体の展開図だ。

「……なにこれ？」

「サイコロの設計図」

点線で折り目となる部分を書く。それだけではわからないと見えたので、立方体の上面の「ふた」が開いているような図も書いてやる。

「わかる？」

と聞くと、どこか納得出来ない様子で首を横に振る。

「これ、ちがう。だってこれ、かみだもん」

理絵が言いそうな言葉だな、と内心想う。親娘そろって素材にこだわる女、というのはいか

がなものだろうか。

「……仕方がないな」

娘を持ち上げて、肩に乗せる。

「実践の場所に連れて行ってやる」

急に動いたので、娘はわわつ、と声をもらさず。

だが、どうも知らない言葉が出てきて気になつたらしく、

「……ねえ、じっせん、て？」

「そうだな。頭の中で考えたことを、ちゃんとやってみるってことだ」

寝室は居間よりも少しだけ薄暗い。こちらの

ほうが日当たりが悪いのだ。加えて、今の空模様。明かりをつけていないせいもあるが、部屋の中には、どこかしつとりとした静けさが漂っている。

「……触っていい？」

戸惑いと、期待を交えたような声。駄目だよ、と返す。

「見るだけ。触ってはいけない。……私が怒られるんだから」

むー、と不満そうにしている娘の頭を撫でてやる。二人は理絵のドレッサーの前に立っ

た。いくつもの種類の化粧道具がそこに並んで
いるが、そちらは使わない。いずれは必要にな
るのかもしれないが、それはまだ先の話だろう。
今重要なのは鏡のほうで、娘にはそれがしっか
りと見えるよう、椅子の上に立たせている。誤
って落ちると危ないので、両脇はこちらの手で
支えている。

「……サイコロを前に出して」

「こう？」

親指と人さし指で、つまむような持ち方。

「今度は鏡のほうも見て。見えにくかったら、

手の位置をずらして」

うん、と小さくつぶやくと、既にその意識はサイコロと鏡に向かっている。

「なにが見える？」

そう聞いたときと、娘が息を漏らしていたのがわかった。私は微笑んで、ゆっくりと言葉を伝える。

「鏡を使えばね、二つの方向からサイコロを捉えられるんだ。こうすればもう、サイコロに見えなかったサイコロも、ちゃんとサイコロになる」

「……うん。さいころだし、さいころだ……」
「これが実践なんだ、瑞季。思ったことを、ちやんと試してみるってこと」

それからしばらくの間、娘は黙りこんで、じつとサイコロを見つめていた。そして何か気づいたのか、急に表情を曇らせ始めた。

「どうした？」

首をぶんぶんと横に振る。両手を口のあたりにもっていき、何かに対して必死にこらえているようだった。

「どこか痛いのか？」

「……ううん、いたくない。そうじゃなくて」
だんだん顔が赤くなってくる。ああ、これは
泣くんだな、と直感した。

「できない」

声に湿り気が帯びていく。私は問い詰める口
調にならないよう、ゆっくりと必要なことを尋
ねる。

「できない、というのは、何ができないんだ？」

「……じっせん……できない」

娘は顔をくしゃくしゃに歪めて、苦しそうに、
そう言った。それと同時に、玄関のドアが開く

音が聞こえた。

「うあー、雨、もう降ってきてきちゃった。洗濯物取り込んでくれてるよねー？」

走ってきたのか、寝室まで聞こえた理絵の聲はどこか楽しそうにも聞こえる。おおかた、私が家事をやってないのを見越しているのだろう。

私とその声に答えるより先に、娘は椅子から飛び降りて走り出した。瑞季、と声をかけたが、私の方には返事をせず、まっすぐ玄関へと行つてしまった。

「どうしたのー、瑞季。なにか怖いことでもあ

ったの？」

娘を追って寢室を出ると、瑞季が理絵のスカートを両手でつかみ、顔を強く押し付けているのが見えた。理絵は優しい声音で、大丈夫よ、と言いながら娘の背中をさすっているが、その目は私の方を見ており、どうしたの、と問いかけていた。しかし私の方も、わからない、と首を横に振って返すしかなかった。次第に大きくなってゆく娘の泣き声を、私はただ耳を澄ませていた。その日、降り出した雨は日が暮れてしまいうまで、一度もやむことはなかった。

しめやかな夜の空気には、少しだけ雨の名残が感じられた。居間のテーブルの上には小さなグラスと、ウイスキーのボトル瓶が置いてある。足音をたてないようにしてやっていると、理絵はテーブルを挟んで私の向かいに腰を下ろし、小さく息をついた。

「どうだった？」

「大丈夫。今はもう泣き疲れて、充電が切れたみたい。ぐっすり眠ってる」

「そうか、……よかった」

理絵も、そうね、とつぶやく。机の上にあつ

た私の飲みかけのウイスキーのグラスを手に取り
つて、一気に飲み干す。グラスをもとの場所に
戻すと、その衝撃で中の氷が小気味よく鳴った。

「……それで、どうしたの？」

と、理絵は身を乗り出しながら聞いてきた。

「洗濯物も取り込まずにしといて、今度は何を
吹き込んだの？」

声のトーンは優しいが、目はすわっていた。
既に片方の手は私の耳を撫でている。それは、
いつでも捻れる、という合図でしかない。

「い、痛いのはやめよう、ここは平和的に解決

すべきだ」

「そうね。そうできたらよかったのにね」

「いや、待ってくれ。本当に違うんだ。瑞季がサイコロを持ってきて……」

「サイコロ？」

その話に興味を持ったらしく、理絵は耳から手を離した。ようやく落ち着いた私は呼吸を整えると、その経緯を話すことにした。

「……なるほどね」

一部始終を聞いたのち、理絵は納得するよう言った。

「なにが」

「全部よ、全部。どうしてもあの子が泣くことになつたのか、怖がっていたのか。そういうのが全部、わかつたってこと」

私は肩をすくめた。

「とは言っても、こつちにはさっぱりなんだが」
「∴∴いじけるのはやめて、あなたも親でしょ」
「それはわかっている。けど、瑞季のほうはよくわからないんだ」

「もう、仕方ないなあ」

ボトルを手に持って、傾ける。琥珀色の液体

がグラスに目一杯注がれたかと思うと、そのままそれを、私の前に突き出した。

「これで許す」

「……明日は月曜だぞ。勘弁してくれ」

「私の酒が飲めないっていうの」

「……酔ってる？」

「酔ってないわよ」

娘と同じくらいに赤くなっているその顔の前でしばらく逡巡したのち、私は溜息をつきながら、それを受け取った。散々飲んだにもかかわらず、口に付けた途端、あの温かい香りがまた

鼻腔をくすぐってきた。

「へえ、飲むんだ」

「……悪かったな」

「冗談。それじゃあ教えてあげる」

得意そうに言う。娘の表情はいつだって、理
絵からもらってくるのだ。それだからだろうか。
かなわないな、と行ってしまおう。

「……なに」

「いや、なんでもない。教えてくれ」

「わかったわ。それで、展開図、見せたでしょ」

「そうだけど」

「それと、鏡もね。ねえ、瑞季は何を見ていたと思う？」

「……サイコロ、じゃあないのか？」

理絵は大げさなふうに額に手をもっていき、
あー、もう、だからこのとーへんぼくはー、と
ずけずけ言ってみせたかと思うと、真面目な顔
で、私の目をまっすぐにみつめてきた。

「いい、あの子はね、鏡に映ったあの子自身を
見てたの。そしてあの子は、あることを、実践
することができないのだと気づいた。自分で自
分を、一度にすべて見ることは——自分の存在の

確かさを実践してみることは——決してできないことに気づいてしまった」

「そんなの、合わせ鏡を使えば」

「あの場所にはなかったでしょ。それに、それは鏡像、現実のものじゃない。サイコロと違って、ちゃんと自分は現実の側にいるって、確認ができない」

「それが……実践が、できない」

でもそれだけじゃない、と理絵は言った。

「あの子はね、鏡に映った、あなたの姿も見ていたのよ。あの子にとって、自分の親ですら、

本当にいるのかどうかわからなくなってしまうたのよ」

「……だとしたら」

私は目頭を手でおさえる。どうも酔いが回ってきたらしい。

「こちらはもう、何も出来ないじゃないか」

「出来るわ。親でしょう」

「親だからって実在の客観性を子供に伝えるのは難しいにもほどが——」

「そんなんじゃないわよ、愚図」

「でも」

「抱きしめてあげればいいじゃない」

「……あ」

「あの子が、瑞季が、怖いと思っってしまったら、抱きしめてあげる。それだけでいいじゃない」

そうでしょ、と言う理絵の火照った顔が目に入る。その途端、嬉しさと恥ずかしさと戸惑いとが同時に襲ってきた。せめてもの時間稼ぎにと、私はウイスキーを口に運ぼうとする。表面を湿らせたグラスの中にあっただはずの氷は、既に琥珀色の液体に溶けて、なくなっていた。そういえばうちの氷も立方体だったな、と思いな

がら、私はその温かな味をゆつくりと喉の奥へ
流し込んだ。

蠟燭

小春

私の愛する　とお子様を送る花束

いかゞお暮らしでいらつしやいますの。

貴女が学校をお辞めになられてから、たうく一年が経ちました。わたくしはお休みの日がまゐります。度々、寮から出でて、ただ海ばらのはてをぼうつと眺めて居ります。一年前と、いくぶんも変わりはありません。わたくしの隣に、只貴女がゐらつしやらないといふだけです。

近ごろ、わたくしの頭のなかに、なにやら不
穩な考へが浮かんでは消え、消えては浮かんで
まゐりますので、一思いにおたずねいたします。
どうか、この失礼をお許しあそばして。

貴女は、ほんたうに、わたくしの足元に今も
こうして打ち付ける、海の真珠となられたので
はありませんか。思へば、わたくしはいつも不
安な心持で居りました。貴女はとてもくお美し
く在られましたが、同時に、今直ぐにでも、す
うと透きとほつて居なくなつてしまふかもしれ

ない、はかない、すずらんの花のようなお方でも在られました。

貴女のお家に不仕合せが在られましたこと、わたくし、存じ上げておりました。御父上が亡くなられて後、故郷の御母上とお二人でお仕事をなさつて居らつしやるとのお噂、うかがつて居りました。先にご無礼をおわび申しあげます。わたくし、貴女がお造りのらふそくを一束、婆やに買い求めにうかがわせました。きつと厭な気持ちにさせますこと、心苦しく思ひます。

けれど、らふそくに燃へるやうな朱色で描かれた小波——わたくしと貴女がこの街で一緒に見た、この夕暮れ時の海の情景と違ひありません。嗚呼、この便りにもお返事頂けませんこと、察して居りましたよ。ただ、貴女にお会ひできるなら——悪い考へはよします。亦お手紙します。小夜奈良。

波の燈火あかりのもとで

野枝子より

とおこ
人魚子さまへ

わたくしはたうく、この女学校を卒業する日を迎へることとなりました。わたくしはこの女学校生活の中で、只一人の方を心から——、さうです、心から愛しく思つて居りました。

とお子様は三年生の時にお父様を亡くされました。そして、女学校をお辞めになりました。その後、直ぐにふる里にお帰りになりました。わたくしは寮に暮らして居りましたので、ふる里にお帰りになられたとお子様をただく恋ひ

慕ふだけの日々、遠く彼女をお訪ねすることは叶ひませんでした。

わたくしは卒業証書を頂きました後、とお子様と二人で語らった想ひ出の海岸に行きました。

真白い貝殻だけをあつめ、白い砂を選び、少しだけ瓶につめました。

とお子様は、海が大好きでした。

とお子様のふる里にも、美しい海岸があるのです。

海ばらを眺めてあそばします、とお子様の瞳。何時にも増して憂ひを含む、涙がかつた眦の美

しき——。

この瓶を持つて、わたくしは今宵、夜行列車に乗り込みます。想ひ出の海をお届けするのです。

わたくしは寮へ荷物を取りに帰りますと、寮母さんから小包を頂きました。わたくし宛てに、今朝ほど届いたのだと言ひます。

お届け主は「中道とお子」様。これまで一度として、お便りをくださらなかつたとお子様——。

小包を開けますと、中には赤い表紙に紺と白で馬やらが描かれました本が一冊。茶色の封筒

に入れられた真赤な蠟燭が二三本。

シロツメクサの添えられたカアドには「のえ子さま、ご卒業おめでたう」の一文。

とお子様、わたくし直ぐに貴女に会いに行きましてよ。

その前に、貴女から頂きましたこの真赤な蠟燭を、想ひ出の海岸に灯してからでも、列車の時刻に間に合ふかしら。

「とお子様が好きなお海だもの、この綺麗な蠟燭

をあげれば、神様もお喜びなさるのにきまつて
あるわ」

——月の明るい晩のことでありました。たゞ青い
青い海の上に月の光が、果てしなく照らしてゐ
るばかり——。

(了)

・本文中において、小川未明著「赤い蠟燭と人
魚」の文章を一部引用した。

【露湖子捕物帖】
虚像囚人三〇三

伊吹亞門

万年雪華で覆われた不融の大氷原。地を駆け
る獣、空を舞う鳥の姿はどこにも無く、時さえ
凍てついた静寂の世界がそこには広がる。そし
て、そんな白銀世界の最果ての地、現世の果て
とも思える地に、その黒い監獄病棟は建つ。

樺太第七管区特別監獄院、通称『黒いバス
テイーユ』。黒煉瓦造りのケルト・ルネッサンス
式城館で構築されたその監獄は、遠目にはかの
フランス大革命の火ぶたが切られた地の様な美
しい外観を持つ。だがしかし、その内部には。
様々な理由で以て通常の監獄では到底扱えな

い様な囚人たち、総勢九十六名。『要特別治療』の名の下に全国各地の監獄から捨てられた彼ら彼女らは、この極寒の地でただ死を待つのみであつた。若い女を爆殺し続けた老婆、他人の脳髓だけを貪り食べる哲学者、分泌される毒液で三十人を殺した少女……そんな異形の囚人たちが凍える暗闇の奥底深くで、静かに静かに蠢いているのである。

浪越露湖子がそんな『黒いバステイユ』に招かれたのは、吐息も凍てつく、ある激しい吹雪の夜だつた。

*

『黒いバステイーユ』最上階、副院長室にて。
「わざわざお越し頂いたのに、大したおもてなしもでき升んで」

監獄院副院長、座間減水は紅茶を注ぎながら
そう言った。二メートルを超える巨軀に似合わぬ
小さな声で、申し訳なさそうに座間副院長は
続ける。

「昨夜第二房棟で暴動があり升て。目下、芹沢
院長自ら出向いて鎮圧作業中なのであり升」
「院長御自らは」

怖い怖いと呟きながら、露湖子は注がれた紅茶を啜った。

「私はそんなこと気にしませんよ。それよりどういうことです、三〇三号がまたやらかしたんですって？」

露湖子に対して座りながら、副院長は重々しく頷く。

「その通りであり升。全く一体どうなっておりますのか、先週だけで職員囚人合わせて二十三人。あり得ない状況下で三〇三号に殺されたのであり升」

*

囚人番号三〇三。女子大小路連続通り魔事件の
実行犯として三年前に死刑判決を受けた彼が
この『黒いバステイーユ』に送られた理由は、
少なくとも見積もっても五十以上は該当する。精神
的残虐性、特異体質、誇大妄想癖、精神逸脱性
：：詳しく挙げていってはきりが無い。収監さ
れていた名古屋拘置所において三度目の殺人未
遂事件を起こしたことをきっかけに、乙級死刑
囚としてここ『黒いバステイーユ』へと送られ
たのである。

法務省から報告を受けていた監獄院院長 芹沢鳩は、厄介事を裂けるべくすぐに三〇三号の刑執行許可状にサインをした。その結果、送致完了一時間後という異例の早さで三〇三号はガス室へと送られることとなった。だがしかし、三〇三号がガス室内の椅子に座らされ、執行官が最期の扉を閉じた時、事件は起こった。突如、鋼鉄製の扉をすり抜けて、ガス制御室へと三〇三号が歩み出てきたのである。

その場にいた全ての者が、三〇三号の突然の出現に驚いた。無理もないことである。三〇三

号は閉じた扉から『すり抜けて』現われたのだ
ったし、何より、ガラス越しに見えるガス室内
には、まだ当の三〇三号が座っていたからだ。

二人目の三〇三号：：すり抜けたそれは扉の
前で、ただぼんやりと立ち尽くしていた。姿形
はガス室内に見える『本物』と全く同じで、何
一つ相違点が見られないことも周囲の混乱に拍
車をかけた。しかし、気を取り直した執行官た
ちが取り押さえようとした時、突然それは動き
出した。

いつのまに手に入れたのか、その左手に握ら

れた小刀でその三〇三号は近くに寄る執行官たちの顔を三〇三号は次々に斬り裂いていった。ほとばしる血飛沫。つんざく悲鳴。突然の出来事に、制御室内がパニックに陥ったのは説明するまでもない。慌てた数人の職員がそれに向けて短銃を撃ち放ったが、弾丸は身体を通過し背後の壁にひびをいれただけで終わった。そう、その三〇三号には物理的接触ができなかつたのである。押さえ込もうと飛びかかっても、その身体はあたかも実体がないかの如くすり抜けてしまい、倒れたところを後ろから刺される。一

分も経たない内に、制御室内は血で染まった。

報せを受けて駆けつけた芹沢院長、座間副院長ら百戦錬磨の獄卒官たちでさえもその暴走を止めることは出来なかった。結局、依然としてガス室内に残っていた『本体の』三〇三号に向けて、芹沢院長から刑執行中止が正式に言い渡されるまで、その『もう一人の』三〇三号が殺戮の手を休めることはなかったのである。

*

「……というわけであり升よ。以降、どれだけ嚴重に三〇三号を閉じ込めても、そいつが出歩

いてひとところに暴れていくので、全く以て処刑どころではないのであり升。本当にまあ、姿見えども触れないとあつては、我々としても手の打ちようがないのであり升」

説明を終えた座間副院长はそう言つて顔を上げる。肘掛けの上で頬杖をつきながら、露湖子は大変ですねとだけ答えた。

「だから浪越殿にはわざわざお越し頂いた訳であり升よ。三〇三号は一体どんなトリックをつかっているのであり升ようか」

伸ばした人差し指で唇をぽんぽんと叩きつつ、

露湖子は考える。

「トリツクなんて無いんじゃないかしら。たぶんそれは正真正銘、三〇三号の影ですよ」
え、と副院長は慌てて露湖子の顔を見直す。

「影、であり升か？」

「影、であります。ドツペルゲンガーでもいいですけど」

どっぺるげんがあとオウムの様に繰り返す座間副院長。

「わざわざ無理してまで論理的な説明をつける必要はないでしょう。そういう面倒くさい力を

持った奴だって、別に一人や二人はいてもおかしくはないし、要は三〇三号の処刑ができればいいだけの話でしょ？ ドツペルゲンガーが出歩いていてるのならば、それを捕まえて一緒に処刑すればいい話」

「まあ、確かにその通りではあり升が……」

事もなげに言う露湖子に対し、座間副院長は不安そうに首を傾げる。

「そんなことができ升か？」

「だから私を呼んだのでは？ 確か地下に離魂病患者用の実験室があったはず。そこに三〇三

号を連れてきて下さい。それと処刑用の短銃も忘れずに」

浪越露湖子はそう言つて、すっかり冷めてしまったカップを唇に運んだ。それ以降、どういう狙いがあるのかを尋ねられても、露湖子は一切口を閉じたままであつた。

*

『黒いバステイユ』地下三階、第五被験室にて。

十畳ほどの狭い部屋であつた。濃い紫のカーテンが引かれた壁の一面を除き、壁や天井、床

までもが汚れた黒煉瓦でできている。そして、その部屋の中央で、三〇三号は木製の貧相な椅子に腰掛けながらただにやにやと笑っていた。

（ついに、この日が来たか……）

身の内から沸き上がる興奮に、身体の震えは止まらない。彼の『影』は座間副院長と浪越露湖子の会話を全て聞いていたのである。故に自分への刑が再び執行されるであろうことも知っていた。それでも、彼があえて何の抵抗もせず、にこの場へ連れてこられたのは、もちろん訳があつたのことだった。

（この私を処刑だと……笑わせる。あの小賢しい小娘が）

かつて、三〇三号は自らの犯罪性に絶対の自信を持ち合わせていた。誰にも自分を捕らえることは出来ない。誰にも自分の犯罪意図は予測できない。そんなプライドに充ち満ちた彼の犯罪は、確かに一級であったと言えよう。だけれどもよろずの物事において、上には上がいるものである。

三年前の通り魔事件の際、三〇三号は自身の最高傑作だと思っていたその犯罪を露湖子の手

によつて実にあつけなく暴かれた。そしてのみならず、あえて彼がその計画を完成させる直前での捕縛を提案したのが自分より十以上年下の小娘だと知つた時、彼は愕然とした。

（私が、この日をどれだけ待つたことか）

三〇三号には一つ、決して忘れられない光景というものがある。それは自分が捕らえられた際のこと、幾人もの警官に押さえつけられ、地面に這いつくばつた状態の三〇三号を見下ろしながら、浪越露湖子はこう言つた。

「少し、勉強が足りなかつたね」

あの時の事を思い出すと、三〇三号は全身の血液が煮えたぎる様な激情に駆られる。幾日、幾夜、この日を、浪越露湖子を自らの手で葬り去る日を三〇三号が待ちわびていたことか。

「それも、今日で終わりだ」

そう呟いた彼の背後では、同じ様に怨めしげな顔の三〇三号が、彼の『影』が立っていた。

その『影』はもう一人の三〇三号であると同時に、三〇三号本人でもあった。『影』とは一体何なのか。それは三〇三号自身にもよく分からない。ただ確実言えることは、この『影』を三

○三号は自身の意のままに扱えるということだけだった。

ガス室の扉が閉められ、さすがの三〇三号も死を覚悟したその時、彼は自分の前に立つもう一人の自分を見た。目前まで迫った死が、皮肉にも三〇三号の特異体質を開花させたのだろう。だが、今となってはもうそんなことは三〇三号にとってどうでもよいことだった。ただ一つ、あの憎き浪越露湖子をこの手で葬り去ることにさえ出来るのならば。

当然、あの副院長室で露湖子の首に刃を突き

立てることも可能だった。いや、三〇三号が『影』で露湖子の姿を見た時は、むしろそうするつもりだったのである。だがしかし、

（見てやろうじゃないか、一体どうすれば私を殺せると言うのか……そしてその後で……）

唇の端を歪めながら三〇三号はその右手を、幾人もの人間を斬り刻んできた手を眺めた。そして、

がちやり

鈍い音をたてて扉が開き、とうとう待ち人が現われた。

「やつと来たか……寝てしまふところだったよ」
濃紺色のコートに黒のソフト帽。吹雪の名残の水滴を、未だ黒髪に二三見せながら浪越露湖子はようやくやく対決の場へと姿を現した。後ろに控える座間副院長は手で合図して、見張りの衛士を下がらせる。

三〇三号に歩み寄りながら、露湖子は親しげに声を掛ける。

「お久しぶり。元気にしてた？」

「君のおかげでね。ここでの暮らしもなかなか快適だよ。幾分か肌寒いのは否めないが」

それは結構と露湖子はわらう。おどけた口調で、三〇三号は問いかける。

「それで？ どうやって私を殺そうというのかね」

意外そうに目を見開く露湖子。

「あら、ここは病院よ？ どうして殺したりするもんですか。あなたは病人なの。今から行うのは治療であってそれ以外の何でも無いわ。何か勘違いをしてるんじゃないかって」

「何が『なくって』だ。浮薄な弁術は止めたまえ。骨まで透けて見える様だ。ならば先に問わ

せてもらおう。君の考えた策というのは、こ
やっつて君に神経が注目している隙を狙って座間
に私を撃ち殺させることなのかね？」

突如、壁際からこちらを見ていた座間副院長
の脇に三〇三号の『影』が現われ、副院長の手
に銀色の小刀を突き立てた。うっと呻き声を上
げて、副院長の大きな手から何かがこぼれ落ち
る。『影』に拾い上げられたそれは、黒光りする
小型銃だった。露湖子の顔から微笑みが消えた。
勝ち誇った顔で、三〇三号は露湖子を見上げる。
「どうした。答えたまえよ、浪越露湖子」

露湖子は黙って何も答えない。ポケットに手を突っ込んだまま、三〇三号を下す形で見つめている。三〇三号は失望した様に鼻をふんと鳴らした。

「凶星かい？ はん、名探偵が聞いて呆れる。そこいらの凡人となんら変わらない発想じゃあないか」

『影』は何も言わずに、手にした小型銃で座間副院長に数発の弾を撃ち込んだ。崩れ落ちる様に膝をつく副院長。それを横目に、三〇三号は冷笑する。

「ならば、もう結構」

三〇三号の声に導かれる様に、『影』は露湖子に歩み寄った。そして、ゆっくりとその左手を挙げ、握られた小型銃でぴたりと露湖子のこめかみを狙う。座間副院長はうずくまったまま、壁際からその様子を凝視している。浪越露湖子は顔筋一つ動かさない。

「さらばだ、探偵」

囁く様に、三〇三号はそう言った。しかし、
「なっ……！」

『影』の指が引き金を引いたかのように見えた

その瞬間、『影』が立ちどころに消滅した。かちやりと乾いた音をたてて、小型銃が床に落ちる。眼前の現象が信じられず、三〇三号は後ろへ数歩よろめく。

「後ろをご覧よ。三〇三号」

ようやく開かれた露湖子の言葉に、三〇三号ははっと振り返る。そして、そこに広がる光景を目の当たりにして獣の様な呻き声を上げた。そこには、彼自身がこちらを向いて立っていた。同じ様に驚いた顔で、同じ様に目を見開いた顔で。鏡に映った自身の姿に、三〇三号は絶

句していた。

紫カーテンの奥。そこにあるものは壁一面に反射する、銀色に輝く巨大な鏡だった。『影』の指が引き金に掛かった瞬間、座間副院长がカーテンの紐を一気に引いたのである。自らの虚像に対しながら、三〇三号はただ呆然と立ち尽くしていた。

「あなたは右利きにも関わらず『影』が左利きだと聞いたから、『影』とは虚像に類するものではないかと思ったのだけど」

かつりと一歩踏み出して、浪越露湖子は語り

出す。

「どうやら間違っただけなかなかったようね」

倦怠な微笑を浮かべつつ、露湖子は言の葉を継ぐ。

「『影』が虚像に戻る時、『影』の動きは制限される。あなたが鏡に映っているかぎり、『影』は自由に動けない」

露湖子の言葉に誘われる様に、三〇三号はゆつくりと顔を上げる。そこに映された顔が、驚愕からみるみるうちに赤く染まっていく。

「自らのドツペルゲンガーに悩み怯える者への

治療法はただ一つ。もう一人の自分がいてもおかしくない状況を創りだすこと……つまり全身を映し出す大きな鏡の前にずうつと座らせること。フランス医学界の権威、ジヨルジュ・オーギュスト・シロノワール博士が発明したこの『離魂病患者対鏡治療法』。気に入ってもらえたかしら？」

三〇三号が振り返り、憎悪に燃える四つの瞳が露湖子を睨みつける。そして、

「貴様あつ！」

バネ仕掛けの人形のように三〇三号は露湖子に向

かって飛びかかった。それを待っていたかのように一歩身を引き、浪越露湖子は鋭く言い放つ。

「今だ！」

刹那、座間副院長が内ポケットから取り出した回転式短銃が火を噴いた。瞬時に放たれた三発の鉄弾は三〇三号の右大腿部、左胸部、そして眉間を的確に撃ち抜く。血煙を上げて崩れ落ちる三〇三号。

「院長に代わり升て、お礼申し上げ升」

座間副院長はふうと息をつくると露湖子に一礼し、血溜まりに倒れる三〇三号の元へと歩み寄

る。そして大きな掌で三〇三の頭をむんずと掴むと、そのまま麻袋でも担ぐかの様に扉から出て行つた。

一人残された浪越露湖子。ポケットに手を突っ込んだまま、ちらりと鏡に眼をやつた。血斑で汚れた鏡面に、映るは二人の立ち姿。露湖子は冷ややかに笑う。

「ずうっと、死ぬまでそうしてればいいわ」

浪越露湖子はそうとだけ言うと、ひらりとコートをひるがえし、ゆっくりと扉へ向かつて歩き出す。鏡の向こうで静かに停止した、憎悪の

眼差しをその背中に感じながら。

兆
し

野
邦
丸

がたたん、たん。がたたん、たん……。
車窓越しに、夏の鮮烈な日射しが飛び込んでくる。車内には冷房などかかっていないが、そのかわりに備えつけられた扇風機が俺たちの足下で空気をかき回している。

山あいを抜け、今は見渡す限りの田園をはしる車両に他の乗客の姿はない。俺と、俺の向かいに座る友人だけがこの電車の乗客らしい。俺をこの旅行に誘った友人は手元の文庫本に目を落とし黙ったままである。時折ページをめくられる紙擦れの音だけが車内に響く。

事のはじまりは大学の試験期間、今から一ヶ月ほど前。俺は所属するオカルト研究会の部室で、勉強に追い込みをかけるほかの会生を横目に、きたる夏期休暇に思いをはせていた。

「みて、このカメラ。買っちゃったぜデジタル一眼。何撮ろうかな。ねえ」

しきりに新品のデジカメを自慢する俺だが、必死に勉強に打ち込むオカ研究生達は俺を相手にしようと思わない。これではつまらないと思っただ俺が次に声をかけたのが件の友人、天岸七子だった。

「なあ、見てこれ天岸。カメラ買ったんだよね。この夏休みは撮影旅行するしかないな」

天岸は読んでいた本から目をあげると、俺のカメラを褒めた。

「ねえ、撮影旅行の行く当てがないなら私の田舎に来ない？ なんにもない所だけど、写真を撮る人には楽しいんじゃない」

正直に言って、かなり意外な申し出だった。彼女は物静かで、特別俺と仲がいいわけでもない。確か去年の自己紹介の際、とんでもない田舎からでてきたので物を知らないと言った。

いたのを覚えている。

俺は少しためらったが、結局その申し出を受け、けることにした。天岸が実家に部屋が空いているので世話をしてくれるというのと、純粹に手つかずの自然を満喫したかったのである。

俺は元々とれる見積もりもなかった単位たちを見捨てて彼女のために過去問やノート集めに尽力し、夏期休暇のうち一週間ほどを天岸の田舎で過ごすことを決めた。

ぱたん、と文庫本が閉じる音がした。きいき

いと音をたてて車両が減速する。

「さあ、降りよう」

俺は天岸の荷物も持ってやり、先導されて電車を降りた。電車が通っているのはこの隣町までで、ここからは車で行かなければならないらしい。

「ごめんね。車の迎えが来る手筈なんだけど、まだ来てないみたいだ」

「いや、いいさ」

駅から降りた俺たちはベンチに腰かけて車を待つことになった。駅周辺は人の行き来もなく

静かだ。遠くの田んぼの海にぽつんと学校の白い校舎が建っている。俺は写真をパシヤリととる。天岸は早速文庫本を開いている。しばらく待つと、おーい、という声が聞こえて白い軽トラが向かってきた。

「ななちゃんひっさしぶりだなあ！　こーんないい男連れてきて！」

慌ただしく目の前に停まった車から、黒々と日焼けした男が降りてくる。男は天岸と握手すると俺にも手を差し出してきた。

「こちら、私の叔父さん」

俺たちは握手を交わし自己紹介をすると、早速車に乗り込んだ。軽トラは二人乗りなので、俺は台車に乗って風景を眺めながら行かせてもらうことにする。

台車に乗り込むと、天岸も台車にあがってくる。

「助手席に乗ったら？」

「いえ、私車酔いするから。それになにがあるか教えてあげようと思って」

天岸の叔父はさみしそうにしていたが、天岸の案内はありがたかった。普段もの静かな彼女

も故郷に帰ってきたからか子供のような奔放さを垣間見せている。

がたがたと車に揺られながら写真を撮る。時折天岸がどんな施設がどこにあるか教えてくれる。

「そろそろ私の村に入るよ」

天岸にいわれて道端を見やると、確かに標識が立っている。

その標識の隣を通り過ぎた時。

頭を押さえつけられるような気持ち悪さ。腐った魚のような臭いが。

「う………」

俺が思わず口を押さえ、うずくまると、天岸が心配そうにのぞき込んでくる。

「大丈夫？　酔ったの？」

「いや……、大丈夫だ」

再び顔を上げた時は先ほど感じた気持ち悪さは嘘のように消え失せていた。さわやかな夏の風が青々と光る水田を通り抜けている。

「……それで、あの小高くなっている所の上に神社があつてね。君はああいうの好きそうだから行って見たら？　あとは………」

説明を続けてくれる天岸の声を聴きながら、先ほどの不快感を忘れようと俺は一度深呼吸をした。

俺たちを乗せた車は水田を抜けて住宅の集まる道へ入った。どうやらここがこの集落の中心らしい。その中でもひととき大きな家が進路の先に見えてくる。

「なあ、もしかして……」

「あ。見えてきたね。あれが私の家だよ」
「やっぱり。あの大きな家、いやもう屋敷とい

った方がいいのかもしれない。あの屋敷に俺は寝泊まりすることになるらしい。なんだか一気に事態が大げさになった気がして、俺は生唾を飲み込んだ。

「お前の家、この村のなんていうか、偉い家なんじゃないの？ ホントに俺なんかがお邪魔してよかったのか？」

俺の言葉を天岸は心底おかしそうに笑い飛ばす。

「アハハ、そんなの昔の話だよ。古い家が残っているだけで今はただの一般人。一応寄り合い

なんかでは形式的に座長を務めることもあるらしいけど、しきたりに従っているだけ。だから、君が心配しているような面倒ごとはないと思うよ？ おもてなしもそれなりにしかできないけどね」

笑う天岸の説明をきいているうちに軽トラは屋敷の門を抜け、玄関先に停車した。運転席の扉が開き、天岸の叔父さんが姿を現す。

「じゃああなたちゃん、俺はばあさんのところに戻るから。ねえさんによろしくいっててくれな。彼氏君、こんな田舎だけどゆっくりしてっ

てな」

そんなんじゃないです。そう言いたかったが叔父さんはあつという間に車に戻ると、俺たちをおいて立ち去ってしまった。

天岸は荷物を持つともう玄関まで歩きだしている。俺もそれに従って屋敷の玄関をくぐった。「ただいま」

天岸の声に応えて、中年の男性が現れる。年代から察すると天岸の父らしい。

「おかえり、七子。と、七子から話は聞いているよ」

天岸の父らしい男性が俺に視線を移したので頭を下げる。

「はじめまして、野村といいます。このたびはお世話になります」

どうぞ、と菓子折りを手渡す。男性は嬉しそうにうけとると、天岸に俺を部屋まで案内するよういった。男性と別れ天岸につづいて長い廊下を歩く。

「いやあ、立派な家だ。後で写真に撮らせてもらってもいいかな」

「勝手にどうぞ。誰も怒りやしないよ。さあ、

ここだよ」

天岸にしたがって通された部屋は八畳ほどの和室だった。空き部屋らしく調度品は少なかつたが、俺の下宿より断然立派だ。

喜び勇んで部屋を見まわす俺。だが、なにか嫌な感じがして立ち尽くす。

「なあ……、少し空気がこもってないか？」

「そう？　昨日一応掃除はしたそうだけど、ずっと空き部屋だったからね。そこに窓があるから開けて換気をしてくれればいいよ」

嫌な感じとは、先ほども感じた魚の傷んだよ

うな臭いだった。耐えきれないほどではないがやはり気になってしまふ。俺は天岸の言葉どおりに窓をあける。

天岸は荷物を置いてくるといって自室へ帰っていった。俺は開け放した窓から臭いの元となるようなものを探したけれど、何も見つからなかった。

天岸が戻ってくると、俺は早速カメラを取り出して屋敷のそこかしこをバシヤバシヤととつた。古い建築に興味があると言うと、天岸はこ

んなことを教えてくれた。

「なら、内海のおじさんのところへ行くと面白いかも。村の仏師さんだよ」

仏師という言葉が珍しく、たちどころに興味を持った俺は天岸に案内してもらってその家を訪ねることにした。先ほどまで晴れ渡っていた空が少し曇り始めていたが、写真を撮るのには好都合だった。

内海という家は集落のややはずれの方にあるらしい。結局その家につくまで誰ともすれ違ふことはなく、水田の水音だけが遠くから聞こえ

ていた。

「おじさん、内海のおじさんいませんか」

その家は天岸の家ほどではないにしろ、俺の感覚からすれば十分に大きな家だった。内海という人物はこの家に一人で住んでいるという。やがて作務衣姿の男が家の外に面した廊下にやってくる。

「おう、七子ちゃん帰ってきてたのか。ちゃんとお友達も連れてきたみたいだな」

作務衣の男は上がれ、という身振りをして家の中へ消えてしまふ。俺と天岸も靴を脱いでそ

れにつづいた。離れに作業場があるらしく、そちらに通される。

「仏像を彫っていらっしやるそうですが、写真を撮らせていたただいてもかまいませんか」

「ああ、いいぜ。俺は作業を続けてるんで、勝手にやってくれ」

作業場は薄暗く、内海は言葉少なだった。なんとなく陰気な雰囲気を受けてしまう。作業場の端に並べられた像の方へ向かったが、天岸はその場に座り込んで本を読み始めてしまった。

精巧に彫られた仏像たちはなんともいえない

雰囲気を放っており、内海の実力の確かなことがはつきりとわかった。八面六臂の像、鬼を踏みつけ剣を掲げた像、蓮の上に座り光背を背負った像。どれも立派な仏像に見えるのだが。

「これは鱗、ですか……？」

それらの仏像の腕や首回り、脚などにはびっしりと鱗が彫られているのだった。俺はその鱗を写真に収めていく。

「ああ。この辺じゃ、そうするんだ」

ぶっきらぼうな内海の返答。やはり恣意的にそうしているらしい。このあたりの伝統だとい

うが、そんな話は余所で聞いたことがない。オカルト好きの俺はすっかり興奮して、ここにあるすべての像を写真に収めておこうと一心不乱に写真を撮りまくった。

すると、ある一角に仏像以外の像が集められているのを見つけた。猿や熊の木彫り、薪を背負う人などの像が並べられている。

こんなのも彫るんだな、と思っていると、一体の像が異彩を放っているのに気づく。精巧な像の中に混じってぼったりとした不鮮明な線で彫られた像。それは、上半身が兜をかぶった男

の姿で、下半身は鱗にびっしりと覆われた魚とも蛇ともつかないフォルムをしている。

「これは……？」

振り向いて驚く。いつの間にか内海が俺の背後まで来て立っていた。ほとんど無表情なのでわからないが、もしかしたらうかつに近づいてはいけないものだったのだろうか。

「それは、龍の像だ」

「龍ですって？」

「龍だ。このあたりにかつていたといわれている。この村の名前、きいてるだろ」

薄ら寒い思いがして、俺は頷いた。さつきからあの嫌な臭いがこの像からしているのに俺は気づいている。頭が痛い。咎められているような気がして一歩下がると、内海は俺が足を崩すともも思っただのか手を伸ばしてきた。

「もうすぐ、夕御飯だっつて」

突然天岸の声がきこえた。俺は身をよじって携帯電話を手にした天岸に駆け寄ると、お邪魔しました、と叫んで内海の作業場を後にした。

外に出ると、薄曇りだった天候ははっきりと

曇天に変わっていた。天岸と並んで道を歩く。「なあ、さつきから誰ともすれ違わないけど」「そういえばそうだね。実はこの村のお祭りが近いんだ。みんなその準備に忙しいんじゃないかな」

天岸は不思議とも思っていない様子でそう応える。いまや、天岸の屋敷や内海の作業場で受けた不快で陰気な感じは、この村全体への印象に変わりつつあった。そういえば、村に入ってから感じた頭を押さえつけられるような感じがまた俺を襲っている。どんよりとした空に水田

の水音は不気味なばかりだ。

結局道中すれ違ったのは、なにかの生き物を
啜えた野良犬だけだった。

屋敷に帰った俺たちを出迎えたのは、玄関先
に立っている人影だった。

薄紅色の和服をしっかりと着ている女性のよ
うだが、髪はところどころほつれている。そし
て遠目にもわかるうろんな表情は、どこを見て
ているかわからなくて不気味だ。

「お母さん。ただいま」

天岸が平気な顔で挨拶する。天岸に母と呼ば

れた女性は一拍おいて返事をした。

「……お帰り、七子。野村君……、でしたね。ようこそいらっしやいませ」

その女が呼気を発すると、尋常ではないほどの腐臭が立ちこめた。おもわず客だという立場を忘れて顔をしかめてしまふ。この女はなにかやばいと直感する。

天岸の母は緩慢にお辞儀すると、俺の返答も待たずに玄関を開けた。天岸は何事も言わずにその玄関に入っていく。

食卓に招かれて席に着くと、天岸の父と、昼

間車でここまで送ってくれた叔父が既に席についていて、ビールを飲んでいた。まだ料理は運ばれていないようだが、もうはじめているようだ。天岸の母は厨房にいるのだろうか。

陽気な雰囲気、天岸の叔父と、実直な印象の天岸の父との会話は思うより楽しく、俺は少しの間この村のよんだ雰囲気を忘れて歓談することができた。

「おう！ 忘れてたわ、君ももう呑める歳だな？」

叔父がそういって空いているビール瓶をこち

らにつきだしてくる。俺は喜んで配膳されていた。コップをつきだして、いただきますと聞いた。

勢いよく口に含んだ瞬間に、強烈な違和感を覚えて杯をさげる。臭い。それに、臭いのためか味がよくわからない。口に含んだ液体を吐き出したいがこらえて嚙下する。なんだこれは？この人達は何を飲んでるんだ？

怪訝な俺の様子をいぶかって二人の男が口を閉ざす。

「どうした、野村君？もうぬるくなっていたかな。よかったら栓を開けていないものがまだ

あるが」

天岸の父がそういうと、弾かれたように叔父がそうだ兄さん、ぬるくなつたものじゃいかながなと応じる。そうして冷蔵庫から出された瓶の栓が抜かれ、俺の前に置かれた。

今栓が開かれたものだ。ラベルもよく見知つた銘柄、怪しいところはない。俺はグラスにあらためてビールをつぎ、飲み下す。信じられないことに、臭かった。

やがて、食卓に料理が並べられた。天岸と母

がかわるがわる厨房に出入りし、大皿を両手に運んでくる。二人が席に着くと、本格的に夕食が始まった。並べられた料理は派手さはないものの地元の料理といった感じで十分に食欲をそそった。

おいしそうな匂いが漂ってくるが、俺は食卓のすみずみに目を配らせた。

「魚は？」

一同はきよとんとした顔をしている。

「魚料理はありませんか」

俺の問いに応えたのは天岸本人だった。

「ないよ。このあたりではあまり魚は食べないから。どうしたの？　魚が食べたかった？」

魚をあまり食べない？　だとしたらこの村全体に立ちこめる魚の腐臭はなんなのだろう。

「いや、ごめん。何でもないよ。おいしそうですわね」

俺は料理にとりかかることにした。俺の左隣の天岸の叔父が明るく天岸の母の料理の腕を褒める。食卓の雰囲気は明るく、俺にとってもなじみやすかったが不気味さは消えなかった。

箸を手にとり、芋の煮付けに箸をつける。醬

油の甘辛いいい匂いがするが、口に入れた瞬間。
「うぐっ」

強烈な魚の臭いが鼻をつく。味もおいしいはずだが嗅覚に狂わされてよくわからない。口の中の気持ち悪いものをどうしようかと思っっていると、天岸の母がじっとこちらを見ているのに気づく。

どんよりとしたその視線は俺を捉えているのか。ぽかりとあげたままの相手の口から言葉が漏れる。

「……どう？ ……お口にあうかしら」

俺はもうほとんど泣きそうだった。天岸の母はにたにたと笑っている。

「……はい。とてもおいしいです」

米が。味噌汁が。漬物が。芋が。鶏肉が。みんな磯臭い。食欲なんてわくわけがない。

周りを見るとみんなおいしそうにその料理を口に運んでいる。天岸は何ともないのだろうか。みんな何も感じないのだろうか。

「なあ天岸、この煮付け美味しいな。ちよつとわけてくれよ」

「え？ おかわりがほしいならまだ台所に残っ

てるよ」
「いいから。わけてくれ」
無理をいって不思議そうにしている天岸に芋の煮付けをひとかけらわけてもらおう。天岸の食器に盛りつけられた食事だ。口に含む。魚の腐った臭いが口の中に広がった。

なんとかだされた料理を飲み込み、吐きそうになりながら自室に退散した後。俺はもう限界を感じていた。この村は何かがおかしい。一週間もここに滞在できそうにない。

天岸には悪いが、明日の朝になったら体調が悪
いといつて一人で帰らせてもらおう。

食卓を離れる際、風呂が沸いたら呼びに行く
と声をかけられた。それまで荷造りをしていよ
う。

そう決めて荷物をまとめだした瞬間、ふすま
の外に人の立つ気配が。

「……お湯の準備ができました」

天岸の母だ。あのにたにた笑いが脳裏をかす
める。ごくりと唾を飲み込んで、はい、と返事
をする。

ふすまを開けると、不気味な無表情で母が突っ立っていた。

「ご案内しますね」

廊下を音もなく歩く女に連れられて風呂へ。到着するまで会話はなかった。

木の扉を開くと脱衣所があった。ごゆっくり、と声をかけられる。

なんとなく嫌な予感がしていた。さっさと入ってしまったって今日はもう寝よう。そう考えていた俺は無意識に服を脱ぐ前に浴槽への扉を開けていた。

「？」

まず意識したのは臭いだった。あの鼻をつくような臭い。しかしそのころには異臭に慣れきっていた俺は、目で浴槽をしっかりとらえるまで自分の感じた違和感の正体がわからなかった。

「え？」

生ごみ。

浴槽いっぱい、生ごみが詰まっている。何リットルあるかは目測できないが、とにかく大量に。一瞬、その異常さが認識できなかった。

吐いた。限界だった。胃の中のものが全部なくなるまで吐いた。立っていられなくなってタイルに膝をつけてしまう。ズボンが汚れる。脱衣所の扉からくすくす笑う気配がする。「あははははは。お湯加減はいかがですか？くくくくく」

胃の中のものがすべてなくなっても、胃液を吐き続けた。恐怖で気がどうにかなりそうだった。

自分の部屋まで戻ると、すべての荷物を乱暴

にまとめた。一晩ここで過ごすことの恐怖を考えたら、駅まで歩いた方がましに決まっている。この村は狂っている。あの女は狂っている。

荷物をまとめ、音をたてないように玄関まで移動して、扉に手をかけたとき、背後に気配を感じた。追ってきたのか。もういつそ殴り倒してやろうか。

俺の背中にかげられた声は、天岸七子のものだった。

「あれ、こんな時間にどうしたの」
不思議そうな声で天岸はそう問う。

「帰るんだよ、悪いな。気分が悪くなつてな」
「そんな。ちよつと待ってよ、どうしたのいきなり」

「いきなりじゃねえよ。気づいてなかったのか？ この村、変だぜ。ここに来た時からずっと感じてたものに耐えきれなくなったんだよ」
「え？ なにが気に入らなかつたの。ごめん、わからないんだけど」

「おまえさ、風呂入つた？」

「え、うん」

「ははっ、嘘だろ。髪も濡れてないし。つてい

うか、風呂場にいったならおかしいと気づくはずだよ。それともなにか？ この村では生ごみをぶちまけることを風呂に入るっていうのか？」
俺の明確な敵意に天岸はおどおどとしている。本当に何もかもわからずに困惑しているのだろうか？

「なあ、おまえはここが出身だからわからないのかもしれないけど、この村は狂ってるぜ。おかしいよ。なあ、お前は大学でも普通に生活してたじゃないか。一緒にこの村から逃げようぜ」

「……？」

「なあ、この県って海、ないんだよな。お前の苗字なんだった？　天岸だろ？」

天岸はうなずく。

「昼に内海って男の家に連れて行ってもらったな。あとお前の叔父さん。苗字は何ていうんだ？」

小さな声で、天岸が「水瀬」と呟く。

「おかしいだろ！？　なんで海にまつわる苗字ばかりなんだ？　なんだあの像は？　この臭いは！　ここは本当にヤバいところなんじゃないか？　何とか言えよ、天岸！」

「あのね、それはね……」　言いながら天岸は一

歩踏み出す。

「来るな！！」

俺は絶叫し、天岸は身をすくめてしまふ。

「お前もこの村の一味なんだろ？ あの母親の

仲間なんだろ、天岸！ 内海に会いに行つたと

きあいつは何ていった？ なんのために俺をこ

の村に誘つたんだ！？」

言いたいことをすべてぶちまけた俺はすつき

りし、ある意味安堵していた。緊張が解けてし

まっていた。屋敷の玄関で大声で喚き散らして

いるというのに。

頭に強烈で鈍い衝撃を感じて、俺の意識は遠のいていった。

真夜中。

大轟音で目がさめる。

炎の赤い光とたくさんの人影。奇妙なシルエツト。むわっとした風。

「……………！」

後ろ手で縛られている。足は自由に動くが体中が痛い。顔を上げる。

小高い丘のような所に連れてこられたようだ

った。炎を囲んでたくさんの人影がゆらゆらと動いている。二、三十はいる。

轟音だと思ったのは人々が立てる音だった。彼らは全員が足で地面を踏みならし、奇妙な呪文を唱えている。

奇妙な眺めだった。丘の上にはいくつもの巨石が立ち並んでいる。柱のように人垣を囲み、ここは平地のようになっていようだ。あちこちでかがり火がたかれている。人々が踊りながら口から奇妙な呪文を垂れ流す。

俺は天岸の言葉を思い返していた。小高いと

ころにある神社。祭り。これが彼らにとっては聖域でありかみまつりなのだろう。人間の原初の感情がそこにはあった。

ふっん、と奇妙な音がして一つの人影が崩れ落ちた。てんてんとなにかが俺の方へ転がってくる。天岸だった。

「ああ、野村君、目がさめたね。七子をこんなにし、ああ、こんなにしてしまった。君が変なことを吹き込むからこの子は……。らあいあ」

天岸の父はそういうと天岸を拾い上げ、振り向いて恭しくそれを掲げた。

人垣の中心。かがり火の中心、彼らが祭り上げているのはその巨石だった。

不鮮明なシルエットだが俺にはわかる。上半身は人、下半身は魚の神。顔があるべき所には水星を意味するシンボルが彫られている。この巨石は宇宙から来たのだ。

天岸の父は彼らの祝詞を唱えている。俺がまた巨石に目を移したとき。

さつきと形が違う。この石は。

視られてしまった。生きています。

「うわあああああ」

咆吼して頭から天岸の父にぶつかると。彼の手から天岸と天岸をこうした刃物が落ちる。

俺は夢中で刃物の柄を地中に埋めると後ろ手に縛られている手首の縄を斬った。手首をずたずたに傷つけてしまったが。

後ろをむいているのに背後で何が起こっているかわかる。天岸の父が立ち上がる。天岸が蹴っ飛ばされてまた転がる。人々が足を止めこちらをみている。あの石はまだこちらを視ている。たいまつと刃物が人々の手に渡る。

俺はとつくの昔に走り出していた。その後ど

うなつたかは覚えていない。

その後

二か月ほどたった。もうとつくに大学は始ま
っているだろう。どうなっているかはわからな
い。一度も登校していないのだから。

寝ようとするとあの巨石があらわれるようになつた。恐怖に跳ねおきたときには見えなくなっている。俺の場所をあいづは知っているのだからか？ まだあの眼で俺は見られているのだろうか。

一度だけ携帯電話を見た。サークル生から安否を心配するメールがたくさん来ている。その中の一つが目にとまった。

一週間ほど前のメールだ。

毎年恒例の夏合宿の行き先が決まったらしい。既に実家へ引っ込んでいた天岸から連絡があつて天岸の田舎へ来ないかと誘われたらしい。古い神社などもあつてオカルト話には困らないとか。

どう考えてもおかしい話だが、もう関心はなかった。結局オカルト研究会全25人の会生が

夏合宿に参加するらしい。どうでもいい。俺と天岸は不参加だ。天岸はもう……。

次の日はよく眠れた。夢を見た。オカ研の見た顔がああの異形の神社に集まっている。あの時のようにかがり火が焚かれている。巨石が俺を視て……。

飛び起きた。今。視られている。

ふうう、と耳元に息が吹きかけられる。あの魚の腐臭が鼻を襲う。

瞬きの音がする。頭上何百メートルの高さで巨大な生き物が目を覚ましている。

その生き物は息を吹きかけられるほど俺の近くにおいて、身じろぎするだけで俺を踏みつぶせるほど大きくて大きい。

大きな生き物がそばにいる、という原初的な恐怖が全身を駆け抜けて支配する。何か恐ろしいものが目覚めたことよりもただそれが恐ろしい。

恐怖の中、わかるのは何百メートル先にある瞳が今俺を見ていること。

才力研究生は助からなかったこと。

こいつは俺を殺す気だということ。

おおきなそれは満足そうに呼気を一つ放つと、漫然と寝がえりをうった。

俺の頭上に巨大な影がかぶさる。

「あああああああああああああああああああ！
天を覆うような巨体がゆっくりと降りてくる。

「あああああああああああああああああああ！
地響きのような音がして自分という存在がも

つと大きな存在に飲み込まれるのを感じる。

「あああああああああああああああああああ！

「あああああああああああああああああああ！

「あああああああああああああああああああ！

作者コメント

伊吹亜門

こんにちは、伊吹亜門と申します。傑作選に載せさせて頂きましたのは三作品。学生のかき散らかした拙き小咄ではありますが、これらのうち一つでも「面白い」と思っ
て頂けましたら創り手としてこれほど嬉しいことはありません。今後ともDMSをよろしくお願いいたします。

浅葱なみだ

最後から四行目の台詞を書きたくて生まれたお話です。お読みくださりありがとうございます。

さいとうななめ

このようなかたちで自分の作品を出す機会に恵まれ、大変光栄に思っています。今回は家族のお話を書かせていただきました。我がミス研初の試みであるネット掲載ですが、以降も続けていきたいと思っています。

小春

かくれおん傑作選という素敵な機会に、拙作を採っていただいていたただありがたく思うばかりです。ミス研冊子なのにミステリをできていない作品なので少し心苦しいですが、文体など、幻想的な雰囲気を出せ

るように試行錯誤したつもりです。少しでも喜んでいただければ幸いです。

野 邦丸

邦丸です。なんだかかかくれおんが盛り上がっているよ
うで嬉しい。続け。私の書いたものは田舎の夏というさ
わやかなモチーフを用いたのですがホラー枠だそうで
す。せやな。最近冷やし中華食べてないので地球が熱い
（終始真顔で）。

かくれおん
傑作選
二〇一二年度 前期

発行：同志社ミステリ研究会

編集：由水竜多

HP：<http://dms.zatunen.com/>

BOX：京田辺別館 223 新町学生会館 332

